ならないと云っている。彼は社会性を問題にはしていないが、個人的関係で自然保育が生命とする誘導法を徹底的に説いたのである。

ペスタロッチもまた注入と暗記による偏知教育を排し、人間諸能力の自然な調和的発達を主眼とする人間本性の自覚にまでの教育を主張し、自然の道に従う人道的理想を目的とする個性の解放を説き、民衆を対象とする初等教育を行い、愛を中心とする直視教育を示した。信頼に満ちた愛の環境と直観的経験は自然保育の重要な問題である。

近代のフレーベルほどに子どもを貴んだ人はない。彼は人間教育の中に万物を支配する永遠の法則が基礎をおく永遠の統一を神とし一切を生み一切の中に常住する神的なものを万物の本質とし、人間の秘められた神性を純粋に完全に実現し自覚的意識的に発展するよう助成するのが教育の目的であると力説した。それですべての教育は原則として必然的に受動的追従的な（唯だ保護的防禦的な）もので、命令的断定的干渉的であってはならぬと云い、子どもの自己活動による自由な多方面の学習を説いた。彼は人格の基礎が幼児期に造られ継続的に発展することに注目して幼稚園を創始した。彼は子どもを自由な交友環境においた点で、ルソーよりも効果的であり、さらに幼児の神性実現の方法として構成的創造的な遊戯と作業を掲げ、それに役立てる遊具に着眼したのも大きな功績である。

民主々義教育者デューイーは真理は相対的なものであると云う立場をとり、法則は絶対的なものでなく単に事物変化の次第順序に外ならないと云う。彼は民主々義と教育の中に準備説・開発説および形式陶冶説を排斥し、教育そのものに目的はないが、教育自身は生活であり成長であるから結局成長発展そのものが教育の目的になると云い、教育は絶えざる環境への適応過程であり、積極的にユニークな個性を伸し社会的能率へ向って経験を改造するものであるが、それは成長発達の条件に従い環境を手段として間接的に行われるものと見る。彼が強調する参加は指導者にとっては誘導の範囲を越すべきものではなく、制御さえ最も効果的なものは教師が無意識裏に誘導する場合であると云う。自然を手段としユニークな個性とそれによる社会的能率を目的として、誘導に基づく自発活動を通して創造性と社会性を同時につちかうのは自然保育のねらいに外ならない。

保育所・幼稚園に対する家庭の理解と期待について

大阪基督教短期大学
高橋恵子

(一)目的

教育は家庭と園との緊密な理解と協力のもとに行われて始めてより正しく子どもの成長を期待することができる。それゆえ家庭が園の目的や内容などについていかに理解し期待しているかを調査することは意義あることと考えられる。

(二)手続

対象は大阪都市農村の幼稚園保育所十八園児千八十名の家庭で農村は都心より車で二・三時間離れた郡村である。都市幼稚園は住宅地と繁華街。都市保育所は繁華街と工場裏街地区の園が含まれてい

る。期間は昭和三十二年四月八日から十八日までである。方法として十個の問題[註1]よりなる質問紙法で回答を求めた。

(三)結果と考察

(イ)回答…回答率は全体として農・幼[註2]が最高であるが都・幼の住宅地は八九%で最も高く繁華街はやや低く七二%となっている。これに反し保育所は両地区とも五九%平均でとくに都・保の繁華街七一%に対し工場裏街の三〇%が注目され、仕事で暇がない以外に字の読めないこと、理解に困難などが推察され、家庭への連絡方法について地域的な考慮が考えさせられた。回答者の男女は殆んどが父母で都・幼を除き父の回答率が母より高くなっている。このことは質問の内容と都・幼に比して他区はやや学歴が低[註3]かったなどが考えられ大半が父親の手に渡されたことがわかる。

(ロ)問題に対する回答…紙面[註4]の都合上注目されたことのみをここにあげると、①園の目的について小学校の準備教育と答えたのが農・幼に最も多く文字や数への要求度も農・保が最高で農村が都市に比しやや高い%をしめている。②しつけをきびしくは、農・幼が最高で農村が行儀作法などを重んじたふるいしつけのあり方が都市に比べやや強く残されているのではないかと思われた。③先生に対する期待では、どの子どもも同じように可愛いがってほしいは、保育所が幼稚園に比して高く都・保が最高でこれは現実の社会状勢とともに子に対する親の気持が表われているのではないかと推察された。④P・T・Aなどの出席について毎度出席したいは、都・幼の四五%が最高で他区は二五%内外であり、全体的に六〇%が時々は参加したいと記している。出席不可能は農・保の一五・五%が最高で幼稚園は両区共五%で非常に低い%をしめしている。⑤制服についての要求度では約七〇%幼児の着物や持物を一せいにしてほしいと要求しとくに農村は都市に比し高い%をしめている。最も低いのは都・幼の五四・六%でここでは一〇%の人がスモックや靴ばきなどの一部の物が揃えられることを要求している。制服がよいと書いている人の意見をあげると平等の気持があたえられる。華美にならず気楽に通園させられる。遠足その他で迷子にならない。洋服を作ってやる暇がないので助かるなどで自由を希望する人では、制服だと夢がない、子どもの個性が出ない。制服だとお金が要るから何でもよいのにしてほしいなどの意見が見られた。このように着物や持物についても地域的に考え方や要求度が異っていることが考えさせられた。⑥行事を派手にしたいは、全体として低いが農・保が最高で次に農・幼となり都市に比しやや要求度が高いこと、しなくてもよいは二%で九〇%の人が余り派手にならぬようにしてやってほしいと答えている。⑦文字や教を教えてほしくないは、非常に低く大部分が興味をもってたずねた時には教えてほしいとなっている。⑧義務化については約八割が現状のままでよいと答え都・幼が最高である。これに反し義務化への要求は農・保が最高でこのことはそれだけ施設の必要性を身近かに感じているからではないかと思われる。しかし義務化への要求は全体は低く新入で園生活の日も浅いという原因とともに幼児教育機関の重要性が余り認識されてないと考えてよいのではないだろうか。⑨保育所と幼稚園の差異についての回答は表のようになった。すなわち大半が両者の区別が不明瞭で白紙であったこと、また、幼稚園の概念では小学校の準備教育と答えた%が最高であることをみても両者の意味・目的がはっきりせず、ややはずれて理解されていることが反省される。表の項目に示されるように幼稚園は保育所より一段高いものとされ、同一の幼児を扱いつつも、両者の間に階級的な差異と不平等な教育のあり方が感じられ、親の

幼稚園保育所の相違についての回答

内容的に差異がある	法的に所管が異る	同じ	無答
37.3%	2.6%	5.6%	55.5%

問題	幼稚園と保育所の相違に就て	幼稚園の概念		保育所の概念	
		返答数	(%)	返答数	(%)
1	小学校の準備教育をするところ	104	(31.2)	0	0
2	働きに行く家庭の子供を預かり遊ばせる	0	0	185	(58.7)
3	年齢的に一定している（幼） 一定でない（保）	19	(5.7)	25	(7.9)
	年齢的に保育所の次にすすむところ	5	(1.5)	0	0
4	保育時間が短い（幼）　長い（幼）	7	(2.1)	26	(8.2)
5	経済的に金持がいく（幼） 貧乏人がいく（保）	11	(3.3)	12	(3.8)
6	教師の責任が重い（幼）　かるい（保）	1	(0.3)	4	(1.3)
7	環境設備が整っている（幼） 整ってない（保）	6	(1.8)	2	(0.6)
8	保育所より一段すすんだところ	17	(5.1)	0	0
9	集団生活をさせ社会性を養う	59	(17.8)	9	(2.9)
10	情操教育に主眼をおく	12	(3.6)	0	0
11	文字・数・遊戯等の知識を教える	19	(5.7)	2	(0.6)
12	幼児期に必要な心身の成長を助ける	55	(16.5)	21	(6.7)
13	個性教育に主眼をおく	10	(3)	0	0
14	自由にのびのびと遊び家庭的である	0	0	19	(6.1)
15	健康保育に主眼をおく	2	(0.6)	7	(2.2)
16	華美で行きにくい（幼） 気楽に行ける　（保）	6	(1.8)	3	(1)

（幼＝幼稚園）　（保＝保育所）

心に優越感あるいは、劣等感をいだかしめているのではないかと考えさされた。⑩男女での回答差は女に文字を教えること、行事を派手にすること、義務化の要求度が強く年齢差では、P・T・A出席で毎度出席するが二十代で四三%に対し三十代でぐっと減り二五%となり年齢と共に減少していること、学歴差では、文字への要求、どの子も同じく可愛いがって欲しいの要求度が小学卒の人に最高だったこと等が注目された。

以上でわかるようにこれらの回答は地区的にも個人的にも異っていて、これからの状態を知ることによりP・T・Aその他の諸活動でいかに園を正しく理解させ、より教育的な線に高めていくかが問題とされねばならない。また我が国の保育所・幼稚園のあり方について今後反省されると共にもっと明瞭に両者の進み方を一般家庭に理解させる必要があるのではないかと考えるものである。

（註1）日本保育学会第10回発表要旨54～55頁に書いている。
（註2）紙面の都合で農村幼稚園を農・幼と他区も同様に略した。
（註3）註一と同じ要旨の56頁に対象とした家庭の学歴を書いている。
（註4）回答についての実数%とは同要旨57頁に記している。

幼稚園保育の効果

愛育研究所　多田淑子
村山貞雄

一、調査の方法

幼稚園保育の結果、どんな効果があるだろうか。

その一つの方法として、幼稚園教諭と母親にそれぞれ担任の幼児と自分の子どもについて、この一年間またはこの二年間に、「幼稚園へいかせた結果、効果のあったと思うこと」について、なるべく具体的に、箇条書きにかいてもらった。

調査の時期は、三月一日から五日までをえらんだ。

調査の対象とした幼稚園児数は、千百五十名であったが、回答がえられた幼児の人数は、母親のほうが七三二名、教師のほうが八三三名であった。